

図書館員の四季

との有り難さを噛みしめている。

当院の図書室は、利用者にとって「あそこに行けば何とかなるかもしれない」という期待の持てる部署でありたいと願っている。依頼を「受けるか否か」ではなく、「いかに処理するか」を検討したいと思っている。

何度もパンク状態に陥りながら、何とか利用者の要望に応えたく、「これも産みの苦しみ」と思いつつ業務の枠を限らずに来た。今後は「育ての苦しみ」を味わうことになると思うが、利用者の向こう側に常に「患者さん」の姿を見つつ、日々努めていこうと思う。

それにしても、1月末に経験した本当の「産みの苦しみ」は、想像以上に苦しかった。これからこの言葉を使う時は、力の込め方が違うと思う。

私の趣味

名古屋第二赤十字病院 宮岡 千代子

私の趣味の一つに相撲観戦があります。長い間ファンだった力士は、引退して、親方として活躍しています。引退後は、親方になる人、廃業してチャンコ鍋屋に転身する人とさまざまです。

親方となって、弟子を育てていくことは、非常に難しいことです。親方になるのも、相撲の世界は国技という伝統の重みから、上下関係も厳しく、努力と忍耐が必要です。それに加えて相撲のうまさだけでなく、人を育成していく総括力のある器と運が要求されます。その厳しい条件を、すべてクリアするのは、並大抵の事ではありません。それだけに魅力があり、相撲界に残りたいと思っても、残れない現実があります。

先日、あるテレビ番組で、栃錦後の故春日

野理事長の特集を見ると、トントン拍子に出世し横綱になった人ではなく、貧困の幼少時代を経て、幾度の荒波を越え苦境にも負けず、努力と稽古で体得した横綱です。決して恵まれた体型ではなく、その小さな体をカバーするために、技能で相撲ファンを引き付けた人です。その後も小兵力士の活躍が相撲ファンを楽しませてくれます。

相撲も視点を変えて観てみると、その人の歴史、考え方が相撲に表れているように思います。ただ白黒の勝負だけでなく、行司が軍配を引いて「ハッケ、ヨイ」の掛け声から、勝負が決まるまでの間、力士の全力を傾けて闘う気合い、意気込みがヒシヒシと伝わってきて、見る人に感動を与えてくれます。それはまさしく凝縮された短編ドラマのようです。私は、これからも相撲の一ファンとして色々なドラマを見ていきたいと思っています。胸がキューとなるハラハラ、ドキドキ感、これが心地良い快感と感動に変わります。

皆さんも、一度、この快感と感動を味わってみてはいかがでしょうか？

花のエキス

近森病院 小川 隆子

図書室が開設されて今年7月で11年が過ぎました。最初のころ入室する人たちの中に、窓を開け放していても「独得の匂いがする」と言われ、芳香剤を置くと今度は匂いがきつすぎるといい、他の図書室ではどのようにしているのかと思案していました。花は見て美しいだけでなく、エキスのような物を発散して人体の血をきれいにしたり、細胞を活発にする素晴らしい働きを持っているとテレビで話していたのを思い出し、四季の切り花を置く